

国内研修レポート

私たちは8月3日～4日に岩手県釜石市にある、甲子仮設 B という仮設住宅でボランティアをした。私は今まで岩手県はもちろん、東北地方へ行ったことがなかった。東日本大震災が起こって今年の3月で4年経つが、その月日が流れた被災地の実態は被災直後の様子も見たことのない私には想像もつかなかった。私はニュースなどで震災が起こって4年目の2015年3月を期限としている仮設住宅が多いことは知っていた。まだまだ復興は完全に進んでいる訳はなく、公営住宅などが完全にできていたため仮設住宅に住んでいる避難者も多い。この活動はそのような状況にある仮設住宅でおこなったのだ。まず、仮設に着いてからは夏祭りの準備を行った。私は事前にそれぞれが作っていた飾りの飾りつけを行った。私たちが到着する前から、テントが張ってあったり、流しそうめん用の竹がセットされていたり、仮設の方々や社協の方々には何から何まで準備を進めてくれていて本当にありがたかった。飾りつけでは住民の方々とお話ししながら準備をすることができた。準備に時間がかかってしまい、開始時間が押してしまったりしたが、なんとか夏祭りは始まった。このときの準備の遅さは学生たちの中でもしっかり時間の把握をできていなく、社協の方に時間を心配される始末だったので、次の活動では時間を意識して行動をしないといけないと思った。まずイベントでは流しそうめん大会を行った。流しそうめん用の竹は、朝近くの林で切ったものだった。住民の方々には椅子に座ってもらい、私たち学生も一緒に流しそうめんをやった。住民の方々の中では初めてやる人も多く、流れの速さについていけないのではないかと少し不安にもなった。しかしみんな想像以上に素早く取っていて、私は住民の方々の楽しそうにそうめんを食べている姿を見られてとても嬉しかった。その後は縁日のイベントでチョコレートフォンデュ、たこ焼き、かき氷、射的、コーヒーなどを出した。もちろんお金はとっていないので本物のお祭りの縁日のように大きなものではないが、住民の方々は本当にうれしそうにしてくれた。中でもチョコレートフォンデュはかなり反応が良かった印象がある。企画の時点で住民の方々は普段やらないものをやろう、ということで決まったチョコレートフォンデュだった。私はチョコレートフォンデュがそこまで珍しいものと思っていなかったのですが、ここまで反応がいいことには驚きだった。初めて見る、という人も多く、慣れない手つきでチョコレートをつけ、本当に楽しみながら食べてくれた。他の出し物でもみなさんは純粋に楽しんでくれていて、「童心に帰った気分だ」と言ってくれた人もいた。この夏祭りのイベントでは子供はもちろん、大人とも一緒に楽しめるように企画してきたものだったのでこの言葉は本当にうれしかったし、やってよかったと思えた。私がボランティアに行く前に不安だったことは、ボランティアが押し付けになることだった。授業などでボランティアを勉強してきて、必要がないボランティアを無理矢理してかえって迷惑をかけたり、嫌な気分になる人がいることを知っていた。もちろんそういうことにならないように話し合い企画していたけれど、自分たちがやるのがそれと同じになってしまうのではないかと、という心配が少しあったのだ。

でも、住民の方々のこの言葉で自分たちのしたことは少なくとも間違いではなかったと思えた。大人と一緒に楽しめた夏祭りであったが、少し残念だったことは遊びに来てくれた子供が少なかったことだ。赤ちゃんを連れてお母さんもいたりしたが、ほとんどこの夏祭りですっといいたのは小学生の女の子一人くらいだ。この甲子仮設 B では、元々子供がほとんどいない。そのことはわかってはいたけどやはり少し寂しかった。それでもこの小学生の女の子とは色々な話をできた。小学校でみんなが持っているランドセルの話や、授業の水泳の話など楽しそうに話してくれた。この子のような子供たちが被災した時は本当に小さいころになるのだろう。被災地の子供たちが受けた傷は本当に大きいものであるし、私にとっても想像できるものではないけれど少しずつ日常を取り戻し、その傷を乗り越えてきているのだ。次にまたこの活動で釜石を訪れる時には、より多くの子供たちと話しをしてみたい、と思った。学校や家でのこと、子供の眼に映る震災はどのようなものだったのか聞きたい。

夏祭りのイベントでは最後によいさ踊りを踊った。このよいさ踊りとは釜石で踊られている踊りであり、もちろん釜石の方々のように上手くは踊れなかったがなんとか成功した。この時も何人かの住民の方々は「サーッサ、ヨイヤッサ」と掛け声をしてくれたり、一緒に踊ってくれる人もいた。他の夏祭りのイベントと同様に、釜石よいさも自己満足で終わってしまうのではないかと私は不安もあったがこのイベントもまた住民の方々と楽しむことができたイベントになれたので本当によかった。こうしてすべての夏祭りでのイベントが終わった。甲子仮設を去る前に挨拶をした際にはみなさんが「ありがとう」「本当に楽しかった」と口々に言ってくれた。この言葉を聞いたとき、本当にこの活動に参加してよかった、釜石にやって来てよかったと強く感じた。また、「ありがとう」「楽しかった」という感情は私のものでもあると思った。私はボランティア“してあげる”というものにはなりたくない、一緒に楽しめるものにしたい、と考えていたのでその通りになれたのではないかと思う。

一日目の夜は甲子仮設とは違う仮設住宅に泊めていただき、二日目の朝を迎えた。朝にその仮設住宅を離れる際、すぐ近くに新しいマンションのような建物が建っていた。その建物は仮設住宅に住んでいた人々が次に住む、災害公営住宅だという。私はその存在を初めて知ったので、とても驚きだった。震災によってコミュニティが破壊され、仮設住宅で形成されたコミュニティも仮設住宅の期限によってまた破壊されるものだと思っていたので、仮設住宅のすぐ近くに災害公営住宅を作りそこに移住することはすごく良いやり方だと思った。だがこの災害公営住宅など被災者の住む場所には問題もたくさんあるだろう。すべての仮設住宅の近くに災害公営住宅を建てられ、そこに住めるとは限らない。また、元々住んでいた土地に帰りたいという人もいるだろうし、その土地に帰れないひともいるのではないだろうか。また、新しい世界に移ることで薄れていくつながりもあるだろう。この

甲子仮設 B
では数年しか一緒にいないはずだが、本当に住民の方々の人と人のつながりは大きいもの

に思えた。この人と人のつながりは簡単にできるものではないし、壊してはいけないものだ。これからの活動ではそのことも考えていく必要があるだろう。

またこの日の朝には釜石の街の様子も見る事ができた。やはり建物は少なく、建設中の土地や空き地が多いように思えた。その中には壁に“津波、ここまで 2011.3.11”という文字と一緒に線が書かれているのを目にした。私は正直に言って、ショッキングだった。私の身長くらいはあったし、その言葉一つ一つが心に突き刺さった。それを見て、本当にここは被災地だということを再確認させられたし、それと同時に震災のことを忘れてはいけないと思った。

この二日間の活動では本当に色々なことを考えさせられたし、様々な経験ができた。ただ、この経験を一回限りのものではなく、繰り返し訪れることに意味があるのだろう。仮設の住民の方々のつながりがあるように、私たちと仮設の方々のつながりもある。このつながりを大切にして次の活動につなげていきたい。